

賀谷信自は、自宅にかかってきた電話に出た。

「決して」という副詞を用いてもどんな陰險な頑固者にもつつかれないほどに彼はこれまでの人生で自宅にかかってきた電話に出たことがなかったが、うだるような暑気さに包まれた今日この日、彼は陰險な頑固者にその隙を与えてしまった。

苗字を名乗ってから、あわあわとあわてふためく電話越しの相手が母だと気付く。

表情は変わらなかったものの、内心では親に毒づく。

微量の毒が漏れ、「用件は」と責めるように問う。

要件は、電話に出たことを後悔するに足るものだった。

『ネコがひかれちゃったの。たぶん』

信自は口を噤んだ。それをどうしろと、という言葉を吐き出さないためだ。声色から母が何を求めて電話してきたのかを即座に見透かした彼は、可否を訊かれない限り、聞くに徹するのがよいと判断した。小さな頃からの積み重ねが成させたものだった。

要領を得ない話が続く。信自は、「ああ」とか「うん」とか「そうだね」とか、表面上はまですものわかりのよい返事を機械的にした。

批判を受けることを、ひいては自分が息子に苦行を強いる母になることを避け続けていた母は、ついに息子にこんなことを無責任に言った。

『でね、ネコの様子を見に行つて欲しいの』

電話はすでに十分は続いていた。様子を見に行つて欲しい、というのは、死体を確認しに行つて欲しい、というのと同義だった。「どうかしら」と母は悪気なく言った。

信自は久しぶりに陽の出ている時間帯に外に出た。ママチャリにまたがり、ゆっくりとこいだ。ポケットには財布とガラケー、前カゴには軍手とタオルがあった。彼は母親に言われた場所に向かった。言われて向かうその場所は、梨農園に挟まれた直線道路だ。

遠くから見ても、あれかな、と思い、近くにまで来て、ああ死んでる、と推測した。目立つ外傷は無いように見えたが、それでもただの学生風情がそう判断したのは、『と』の字になつてぴくりとも動かないからだ。

前からも後ろからも車が来ていないことを確認し、歩道に自転車を止め、軍手をはめた手で死骸を持ち上げる。この世のものでないつめたさ、そしてかたさを以つて、猫の死を確認する。そして、ああこれが死後硬直というやつなのか、と知的好奇心を幾ばくか満たした。

知的好奇心を満たしてくれたその存在に敬意を示すように、はたまた全うした生命の穏やかな眠りを願うかのように、死骸はそつとタオルに包まれ、自転車の前カゴにそつと乗せられた。

信自は焼くような日差しを浴びながら、復路をたどった。死骸の重みを確かに感じながら、キイコキイコと音をたてながら、さながら霊柩車のように、ゆっくりと復路をたどった。

汗を流すのも土に汚れるのも厭わずに彫られた墓穴に死骸は埋められた。

それから三十分後に置かれた花は、彼が自身で判断し、供えた。